

平成 24 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

認知症高齢者グループホームにおける福祉用具適合の効果検証
～軽度認知症入居者の入浴を対象とした福祉用具支援の効果～

学位の種類： 修士（ 作業療法学 ）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域
学修番号 11896602

氏名：太田 智之

（指導教員名： 橋本 美芽 准教授 ）

【目的】公的資金が使用される福祉用具については、定量的な利用効果の検証の必要性が増してくるなど、社会的な検証の必要性が高まっている。これまでに認知症高齢者に対する福祉用具活用の効果検証を行った研究はなく、認知症高齢者への福祉用具適応技術の蓄積の遅れや、認知症の疾患特性に合わせた福祉用具活用についての法的支援制度整備の遅れが生じているものと考えられる。特に認知症高齢者グループホームにおいては、介護保険法の「指定居宅サービスに要する費用の額の算定に関する基準」において、入居者が GH を利用している間の福祉用具貸与費は算定されないなど、介護保険制度を利用しての福祉用具の貸与を認めておらず、精神機能や身体機能の低下・介護の重度化が進むと思われる入居者や支援する者にとっては不利な状況にあるといえる。そこで、本研究では、GH おける福祉用具支援に OT が介入することの効果とその特性を検証することを目的とした。

【方法】GH8 施設 10 ユニットの入居者 90 名に対して予備調査を実施し、認知症重症度が NM スケールにて境界又は軽度の者で、同意が得られた 22 名を対象とした。本調査では、OT による福祉用具支援の介入を 3 週間実施する期間（介入期）を設けた後、現行のケアプランでの設定で入浴を 3 週間実施する期間（非介入期）を設けた群を「前期介入群」、非介入期の後、介入期群を設けた群を「後期介入群」とし、それぞれに対象者を均等に割り付けたクロスオーバー試験を行った。

日本作業療法士協会が提唱する訪問・相談型の「関わり方モデル」を採用し、介入期には、実際の入浴場面における OT による福祉用具選定と、本人、介護職員への動作・介護指導を中心に、①初回評価・使用する福祉用具の選定、②動作方法・介護方法とのマッチング、③設定の調整・変更、④フォローアップの計 4 回の支援を実施した。非介入期には GH で行われているケアプラン設定のまま入浴動作を続けた。評価は入浴に関する主観的評価、入浴動作遂行度評価、機能的自立度評価を介入期、非介入期のそれぞれ開始時と終了時に行うこととし、OT2 名と担当介護職員 1 名が同一の場所にて評価を実施した。

【結果】運動機能の改善がほぼ期待できない慢性期の GH 入居者に対して、環境調整による入浴動作の改善が確認できた。介入方法別にみると、本人に入浴動作パターンの変更を求めるよりも、本人の独自のパターンを促す介入方法のほうが、自立度に改善がみられた。また、入居者の入浴に対する主観評価も高まることが明らかになった。入浴遂行度では、本人、介護職員、OT 間で評価値に差異があり、特に介護職員は介入後の各項目の遂行度を高く採点する傾向が認められた。

【考察】OT による福祉用具支援のプロセスには、本人の機能的自立度を高めるだけでなく、入居者が入浴そのものに対して抱く価値や関心を高める効果をもつことが示唆された。加えて、個別性の高いケアによって可能な入居者の理解という肯定的側面と、制度あるいはユニットケア特有の介護環境により入居者と二者関係に閉塞しやすい問題を併せ持つ GH 介護職員にとっても、入居者の入浴に対する主観的体験に影響を及ぼすことが示唆された。